

一神教と国際安全保障

世界は世俗化しているのか

Overview

- 宗教の起源と展開
- 一神教世界の相互関係
- グローバル・アクターとしての一神教

宗教の起源と展開

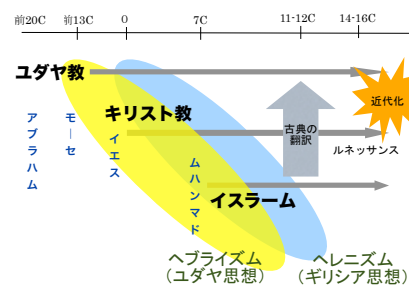
- 原点としての死者儀礼
- 死者からの影響を抑制するための「とむらい」
→ 御霊信仰（祇園祭の起源）
- 戦死者の「とむらい」、死の美化
→ 靖国問題、自爆攻撃
- 「宗教」(religion) とは何か？

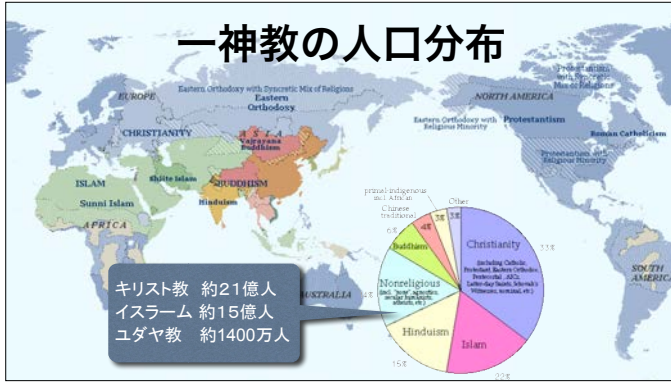


一神教世界の相互関係



一神教の文明論的系譜





一神教の統一性と多様性

- ユダヤ教、キリスト教、イスラームの**歴史的共通基盤**の認識
- アブラハム宗教 (**Abrahamic Religion**) としての自己理解
- それぞれの内部にある膨大な**多様性**の認識

グローバル・アクターとしての一神教

リスクとしての宗教

ウルリッヒ・ベック (ドイツの社会学者)

- 『リスク社会』 (1986年)
- 『〈私〉だけの神——平和と暴力のはざまにある宗教』 (2011年、原著2008年)
- 宗教が、暴力的なポテンシャルを抑制し、平和創造力を高めていくことの成否に、人類の未来が大きく左右される。



近代化という文脈

- 「世俗化」は西欧社会の「近代化」の副産物。
- 非西欧諸国 (特にイスラーム世界) では、近代化 (**modernization**) と西欧化 (**Westernization**) が意識的に区別されてきた。欧米以外の多くの国は、西欧化=**植民地化**という歴史を持っている。
- 近代化や西欧化によって引き起こされる変化に対する抵抗原理として「原理主義」を位置づけることができる (広義)。
- ユダヤ教・キリスト教・イスラームそれぞれの内部に存在する多様性 (多様な集団) は、世俗主義および原理主義からの距離によって計ることができる (**多様性理解の指標**)。

世俗化 (secularization)

- 宗教が社会に及ぼす影響力の低下。西洋の**キリスト教社会**がモデルとなっている。
- もともとこの言葉は、宗教改革の時代に、教会の財産 (土地や建物など) を行政に譲渡することを指して用いられ始めた。そこから、土地などが教会の支配から解放されると同様に、社会や文化が教会権力から解放され、キリスト教の影響が次第に減退していく現象を広く世俗化と呼ぶようになった。
- 1980年代以降、世界的な「**宗教復興現象**」が起ることによって、世俗化論は根本的な見直しを迫られることになった。

世俗主義 (secularism)

- 世俗主義は**政教分離**とほぼ同義に用いられてきた。
- 政教分離の前提
 - **私的領域**と**公的領域**の分離
- 政教分離の多様性
- 分離のあり方をめぐる論争

参考文献

- ウルリッヒ・ベック 『〈私〉だけの神——平和と暴力のはざまにある宗教』 岩波書店、2011年。
- 小原克博 『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』 晃洋書房、2010年。
- 世俗化については序論を参照。